

ポケットモンスターSparkling

初雪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【コメディ+冒険+百合+ポケモン】

アニオタの少女ココナはシンオウリーグに挑むためコトブキシテイから旅に出るのだが、出発早々ポケモン強盗と遭遇し、立ち向かうもののボコボコにされる。そこに現れたのがヒカリだった。無事に旅は始まるが、運が悪いトレーナーが集まったせいかわりに死にかけながら旅を続けていく。そんな感動あり漫才ありバトルありの冒険を描いた物語。

七話ぐらいから面白くなるので序盤で飽きた人は七話から見てください。

目次

第1話	新しい風は吹く！	1
第2話	バカと強盗とシンオウチャンプと202番道路	4
第3話	野良ハヤシガメを避けてマサゴへ！	9
第4話	ようやく到着！	12
第5話	ポケモン凶鑑と二匹目のポケモン	16
第6話	コトブキへUターン！	19
第7話	挫折の日	23
第8話	才能	29
第9話	草むらへ飛び出そう！	36
第10話	渡れストーカー！マイ登場！！	43
第11話	ココナ達、逮捕される。	47
第12話	波乱の刑務所	51
第13話	シャボンを突破せよ！	59

お母さん「で、どうするの」

ココナ「いやあ、行きたいのはやまやまなんですけど、けい○んの再放送が終わってないし、ゆる○りの円盤買ったばかりですs」

お母さん「そんなこと言うと思ってこれ買つといたわよ」

ココナ「おつ、おつかさん、これはCギアX—f i v eゼロ型じゃないですかあああ」

説明しよう！CギアX—f i v eゼロ型とはジユウト地方でおなじみだったCギアの最新型で、地上波とBSが見られたりもするすごい端末である。定価25740円（税込み）。

ココナ「母上様ああああああああああ」

お母さん「で、どうするの」

ココナ「行きます！私、行きます！」

お母さん「急にテンション上がったわね」

ココナ「ポケモンマスターになるよ」

お母さん「ハードル高いわよ。∩。∩。;」

ココナ「いつてきm.:.」

お母さん「ちよい待ち」

ココナ「何お母さん」

お母さん「パジャマじゃないの」

ココナ「あ、そうだった」

ココナ「よいしょつと」

お母さん「それにモンスターボールもバッグも持ってないし。コンビニでも行くつもり？」

ココナ「あはは」

お母さん「あははじゃないわよ」

5分後

ココナ「準備完了！行ってらっしゃい」

お母さん「いつてきますでしょ」

ココナは202番道路へ向かっていた。

ココナ「ことぶきしていいーにーさよならばいいーい♪わたしはこのことおーたびにでるうー♪」

くー「くるうん！」

街の住人たち「やめろー!」「キヤー」「俺のムツクルが…」

ココナ「悲鳴!!」

ココナは周りを見渡した。そこにいたのはサザンドラを連れた男だった

ココナ「ちよつとなにしてるのよー!」

男「ああん？」

c o n t i n u e

T o b e

第2話 バカと強盗とシンオウチャンプと202番 道路

男「ああん？」

ココナ「ヒエツ」

男「あんだよてめえジロジロ見やがって。」

ココナ「さつきから人とかポケモンとかになにしているのよ」

男(以下強盗と表記)「あん？俺は強いポケモンを強盗しようとしてんだよ。この街は都会

だから金持ちとかつええヤツいんだろ。」

ココナ「最低ね！クズね！」

強盗「あんだとお!？」

ココナ「あつ、そつかあーそんな欲望むき出しだからニキビだらけなんだね。なんでそんな

なブツブツブツブツきつたないのかなって思ってたんだけどそういうことだったんだあ」ココナ

ナはDSモードになった。

強盗「なっ… えっ… そんな…」ナイーブな強盗に効果はバ

ツグンだ！

強盗「てめえ… 喧嘩うってんのか？」

ココナ「ちよwwwwww喧嘩売ってんのかあだつてwwwwww厨二乙

wwwwww」

強盗「病院で後悔してる！ サザンドラ、竜の波動！」

ココナ「くー、守る！」キュイーン

ココナ「影分身してそのまま氷のキバ！」

くー「くるうーん！」シユシユシユシユシユ ガブツ

ココナ「ふふふ、相手はドラゴンタイプ。効果はバツグンn…」

強盗「ハハハハハ。俺のサザンドラはそんなヤワじゃねえぞwww」

ココナ「うそ!?! 耐えてる!」

強盗「サザンドラ、ドラゴンダイブだ!」

サザンドラ「ガザアーー！」ドラゴンダイブがクーに直撃した。クー「くるう…ん…」クーはもはや戦える状態ではない。

ココナ「クー?!大丈夫?!」

強盗「ははははは良い様だ！もつとやれ、焼き尽くすだ！」

サザンドラ「ガザアーー！」クーに命中。

ココナ「待つて、クーはもう瀕死なのよ？もう… やめて…」

強盗「俺を侮辱したからこうなるんだ。サザンドラ、とどめを刺してやれ」

サザンドラ「グオアーー！」サザンドラは竜の波動を出すかまえをした。

ココナ「やめて… 死んじゃうよ…」

強盗「やれ」

ココナ「くーーーーー！」

その時だった。

???「ムクホーク、インファイト！」

ムクホーク「ホオーーク!!」ドドドドドドド

サザンドラ「ザア…」サザンドラに命中。サザンドラは倒れた。

ココナ「ふえつ…?」キョトン…

強盗「なつ… どういうことだ… だつ、誰だ?!」

ヒカリ「私はヒカリ。バッジ8個もないくせにそんな弱いサザンドラで強盗なんて頭クル

クルパーね。出ておいで、ゴウカザル。」ポムツ

強盗「えつ…? えつ…?」

ヒカリ「ゴウカザル、あの強盗を草結びで拘束して。」

ゴウカザル「クウアー」クルツ

ヒカリ「うっし、ありがとう！んじゃ、強盗さん、ジュンサーさんに連行される心の準備はあるわね？」ヒカリはそういつてウインクした。

街の人々「すげえ!」「かっけえ!」「あの人チャンピオンじゃね?」

「ブラボー!」

ヒカリ「あくどうも」テレテレ

ココナ（可愛い… じゃなくて！）
ココナ「あつ、ありがとうございました！」

ヒカリ「なんもよくあれくらいく あのままいったらわいやだったわね〜」

ココナ「あの、ヒカリさんですよね」

ヒカリ「うんそうよ」

ココナ「あのシンオウチャンプの？」

ヒカリ「えっ、知ってるの？ あたしも有名ね〜」

ココナ「まじですかあのヒカリさんですか!？」ソンケーノマナザシそう。このときココナは知らなかった。

これからどんなチャンピオンの威厳が失われていくのを見るのが日常になるなんて。

ヒカリ「そういえばあなた、ココナちゃんって人知らない？」

ココナ「私ですけど」

ヒカリ「あ、じゃあ丁度いいわ。あなた博士に招待されたわよね？」

ココナ「はい」

ヒカリ「じやついてきて！私、コウキくんかわりに博士の助手っぽいことやってるの」

ココナ「コウキクン？」

ヒカリ「あ、私が冒険を始めた頃に出会った博士の助手よ。私と同じ年の14歳で、今はカロスにいるの。」

ココナ「そうなんですか。」

ヒカリ「じゃあついてきて！」

ココナ「はいっ！」

202番道路

ヒカリ「あ、タメ口でいいよーさん付けもいらないし」

ココナ「え、でも」

ヒカリ「相手だけ敬語使われるとなんかアレなんだよね（笑） 歳も同じぐらいでしょ?」

ココナ「まあ先月13歳になったところです。」

ヒカリ「んじやいいじゃん」

e
c
o
n
t
i
n
u
e

T
o
b

第3話 野良ハヤシガメを避けてマサゴへ!

ヒカリ「ガハッゴホッ

ココナ「なんでこんな目に…。」ゼーヒュー

ヒカリ「大変だったね」

ココナ「ヒ… ヒカリが… スピアーの巣なんか落とすから…。」

ヒカリ「いやあ、あそこにあつたとはね。でも出物腫れ物所嫌わずって言うじゃん」

ココナ「それ意味違う」

ヒカリ「じゃあ柵からボタモチ？」

ココナ「木から落ちたのがボタモチだったらどれだけよかつたか…。」

ヒカリ「まあまあ、そんなこともあるって!大丈夫大丈夫!」

ココナ「は、はあ…。」

ヒカリ「よっし、マサゴはもうすぐよ!」

くー「きゆる!」

ココナ「どしたの?」

くー「きゆる!くるうー!」くーは指をさした(?)

ココナ「ハヤシガメ…!?!」

ヒカリ「えっ… 誰かのポケモンなんじゃ…? こんなところに出るはず…。」

ハヤシガメ「シヤメー!」

ヒカリ「ムクホーク、出ておいで」ヒカリはムクホークの入ったモンスターボールを手に

取った。しかし遅かった。

ハヤシガメ「ぐおおおお」

ヒカリにむかってとっしんした。ヒカリは飛んでった。

ココナ「ヒカリ?!」

ハヤシガメ「ぐおおおお…。」ハヤシガメはココナをにらむ。

ココナ「しっ、失礼しますたー!」スタコラサツサ

くーをボールにしまい、ココナは林へ隠れ込んだ。

ココナ「つてヒカリ!!」そこにはヒカリがいたのだ。

ヒカリ「あ、はぐれたかと思ったあ...」ヒカリは足を怪我している

ココナ「立てる?」

ヒカリ「だいじょうぶイタッ!」

ココナ「これかr...」足音が聞こえた。振り向くとそこにはハヤシガメが。

ハヤシガメ「ぐおおおおお」

ココナ（ヒカリはけがをしてるし... やるしかないわね...）

ココナ「ハヤシガメ。こっちよ!」

ハヤシガメがココナにゆうどうされる。ココナ、こっそりハヤシガメの背後にくーを出す。

ココナ「今よ!影分身!」

くー「くるう!」

ココナ「そのまま氷のキバ!」

くー「くるうーん!」ガブツ

ハヤシガメは耐えた。

ハヤシガメ「ぐおおおおお!」ハヤシガメが攻撃してくる。

ココナ「上よ!上に飛んでよけて!」

くー「くるうん」くーは高く飛んだ。

ココナ「そのまま急降下でワイルドボルト!」技マシンで覚えさせた技である。

くー「くrうううううう」チュド——ン!!

ハヤシガメ「ぐおおお...」バタツ

ココナ「やったあ!倒したよ、私!」

ヒカリ「す、すごい! 私ココナに助けられちゃった(笑)」
その時、くーが光り出した。

くー「くうーん」キラキラ

ココナ「くー?」

くーはコリンクからルクシオへ進化した。

ココナ「進化…した!」キョトン

ヒカリ「あの素早さからみると相当レベル高いからいつ進化するか
思ってたの」

ヒカリ「まさかこんな時なんてね」

ココナ「えええ!! す、すごーーい!」

ヒカリ「よし、マサゴにいk イツタア!」

ココナ「ケガしてるんだよね… どうしよう」

??? 「やあ、大丈夫かい?」

ココナ「だいじよばないです。」

??? 「どうしたのかな?」

ココナ「この子がケガしてて、立てないんですよ…」

??? 「わかった、じゃあとりあえずマサゴタウンのポケモンセンター
でいいかな」

ココナ「えっ?」

プラターヌ「僕はプラターヌ。このリザードンに乗せて連れてく
よ。」

ヒカリ「いいんですか!」

プラターヌ「丁度マサゴに用があるんだ。じゃあ乗って」

o b e c o n t i n u e

T

第4話 ようやく到着！

ココナ「ヒカリが無事マサゴに行けたのはいいものの、なんで私は置き去りなのよ…」

足を怪我したヒカリは通りすがりの青年にリザードンに乗せてもらい今頃マサゴのポケモンセンターにいるのだが、ココナはおいて行かれたため徒歩なのであった。

ココナ「今日は色々酷かった… まさか1日でこんなにたくさん…」

ココナ「あれ？誰かいる」目を向けた先には四つん這いしてる少女がいた。

ココナ「…何してるの？」

少女「ジグザグマってこんな感じなんですネ」プルプル

ココナ「(うわぁ…) 痛いコだ…) そうだね。じゃあね」スタ

クラサツサ

少女「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ！」少女はハイハイしながら追ってくる。

ココナ「ちよ、その格好のまま追わないで！怖い！怖いから！」

少女(以下ノノカ)「私ノノカって言います！」

ココナ「聞いてないよ！」

逃げるココナ。

四つん這いで追いかけるノノカ。

他人が見たら変態である。

ココナ「たーすけーてー！ ってアレ？」ガタツ

ココナとノノカは高めの段差から落ちた。

ココナ「うわぁあああああああああああああ」

ノノカ「アイムフライー！ーング！」ドカツ

ココナ「いた… くない…」ふわふわ

ノノカ「なんかクツションみたいす」

ココナ「これなんだr…」その正体を知ったココナの顔はまっさおであった。

ノノカ「カビゴンだー」

ココナ「あつ、あー お世話になっておりますー で、でわ失礼しましたー」

ココナはカビゴンから降りる。

カビゴン「ぐおおー」

カビゴンは怒っている。カビゴンは立った。

ココナ「ぎゃー！ー！ー！ー」

ココナは逃げる。しかしカビゴンの方を振り向いた瞬間立ち止まった。

ノノカ「私のことはきにしないでー グハツ」ノノカはカビゴンから転げ落ちひるんでいる間に攻撃されそうになっている

ココナ「仕方ないわね… くー！電磁波!!」

くー「くるうー！ん！」ビリリ

カビゴン「ぐおっ… ぐお？」キョトン カビゴンは麻痺した。

ココナ「影分身してワイルドボルト！」

くー「くるうー！ん！」ズドー

カビゴン「グツ… ぐお…」カビゴンは倒れた。

ココナ「モンスターボール！」

ボールが三回揺れ、赤く光った。

ココナ「うっしや！ありがとうくー」

ココナ「おーい大丈夫かえー？」

ノノカ「えっ… あ… あ…」ポカーン

ココナ（?）

ノノカ「すっ、すごい！ 感動しました！私！」

ココナ「あ、ありがと じゃ」

5分後

ココナ（もうすぐ到着だけど、なにか後ろから気配をかんじる）

ココナ「まあいっか。 あ、ついた！」

ヒカリ「おーい！ココナー！」

ココナ「あ、ヒカリ！手当てしてもらったんだね！」

ヒカリ「後ろの人は知り合い？」

ココナ「え？後ろの人…？」
ノノカ「やあ」
ココナ「」

五分後 研究所にて

ヒカリ「博士ー、連れてきましたよー」

ココナ「は、はじめまして！」

ナナカマド「おかえり。やあ、私はナナカマドだ。」ムツシヤムツ
シヤ

ココナ「何食べてるんですか？」

ナナカマド「あんみつだが。食うか？」

ココナ「い、いえ。結構でs」

ナナカマド「いいから食べてみなさい。」

ココナ「は、はい… いただきます つて甘っ」ゲホゲホ

ナナカマド「君には甘すぎたか。で、後ろの少女はだれだ？」

ノノカ「ノノカです」

ココナ「帰れ。」

ノノカ「帰りません！」

ココナ「ならば仕方ない」ココナはムーンボールを構えた。

ノノカ「失礼しました！」

ヒカリ「変な子ね」

ココナ「そうよ（でもヒカリに言われたくないと思う）ね。」

プラターヌ「あ、さつき君だね」

ココナ「あ！なんでここに？」

プラターヌ「あれ、言ってなかったっけ。」

ヒカリ「プラターヌさんは博士の生徒なんだって！」

プラターヌ「そうなんだ。五年前までね。ちよつと来たんだよ。」

プラターヌ「それで博士、僕はカロスへ行きます。」

ナナカマド「ふむ。あの〈謎の進化〉のことだろう。」

プラターヌ「はい。ミアレシテイという都市で研究所を建てます。」

ヒカリ「謎の進化？」

プラターヌ「ああ、僕が12歳のころカロスへ行ったときなんだけど、」

ココナ「12歳!？」

プラターヌ「メタグロスを連れられた石マニアの人と緑色の竜と戦ったんだ。不思議な人だったよ。」

「実験成功」と言っただけから降ってきたんだ。」

ヒカリ「空!？」

プラターヌ「そう。で、ある不思議な洞窟で竜と戦ったんだけど、なかなか苦戦して。逃

げようとしたんだけどなかなかその竜逃がしてくれなくて。絶体絶命だったんだけど、そのとき地面に落ちていた岩の一部が光って、リザードンが黒いからだと言った青い炎を吐いて。それはもう強かった。で、まだ進化するのかもしれないけど、竜から逃げきったらもどつたんだ。」

ココナ「なんですかそれ!?!面白い」

i n u e

T o b e c o n t

第5話 ポケモン図鑑と二匹目のポケモン

プラターヌ「それで、私はカロスへ行きます。土産は」

ナナカマド「ミアレガレットで」

プラターヌ「そう言うと思いました」

ナナカマド「じゃあ、これを持って行ってくれないか」

ナナカマドは石のようなものを手渡した。

プラターヌ「これは？」

ナナカマド「言っていた例のあれだ。今研究しているひとつだ。持っていけ。」

プラターヌ「ありがとうございます！ では、絶対実証しますね。」

ナナカマド「それで、ココナと言ったな？」

ココナ「え… あ、はい！」

ナナカマド「今日来てもらったのは渡すものがあるからだ。」

ココナ「私に… ですか？」

ナナカマド「うむ。まずはポケモン図鑑。これは目にしたポケモンを自動で説明してくれる機会だ。」

ココナ「すごい！」

ナナカマド「それとこれだな。好きなものを選ぶといい」

そう言ってナナカマドは三つのモンスターボールが入った籠を出した。

ナナカマド「今はある研究者のマネをして旅に出る少年少女にポケモンを配っているな。」

君も一つ持っていくといい。」

ココナ「本当ですか!? えーっつと…。」

ヒカリ「ポツチャマは？ 洗濯機や風呂の時節水になるわよ！」

ココナ「家庭的すぎるよ」

ヒカリ「トイレの時も便器いらずよ！」グッ

ココナ「あんたポケモンになんてことさせようとしてんの。(。丱。;)」

ヒカリ「じゃあナエトルは？　いつでも木を生やしてくれるから茂みでトイレ」

ココナ「だからなんてこと考えてんのよ！　ていうかどんだけトイレ好きなのよ」

ヒカリ「出物腫れ物所嫌わずよ！」

ココナ「女の子が言っていていいことじゃないよ！それは！」

ヒカリ「百合のお花を摘みに行くのは大切よ」

ココナ「言い方変えれば良いわけじゃないよ！」

ヒカリ「じゃあどうすればいいのよ！」

ココナ「まずトイレの話を止めよう！」

ココナ「…とまあ、漫才はここでやめて、どうしようかな」

ココナ「うくん…　あっ！」

〈ココナ回想〉

ココナ「やめて…　死んじやうよ…」

強盗「やれ」

ココナ「くー！ー！」

ヒカリ「ムクホーク、インファイト！」

ムクホーク「ホオーク!!」ドドドドドドド

サザンドラ「ザア…」サザンドラに命中。サザンドラは倒れた。

ココナ「ふえっ…？」キョトン…

ココナ（あの無駄にかっこよかったインファイト。ゴウカザルってインファイトおぼえるよね…？）

ココナ「ヒコザルで！」

ヒカリ「ヒコザル？　水も出ないし茂みも生えないよ」

ココナ「トイレはいいの！」

ナナカマド「ヒコザルだな。よし、このボールだ。」

ココナ「ありがとうございます！　よし、じゃあ次はジムだー！」

ヒカリ「おー、懐かしいなあ…　ジム！」

ココナ「ありがとうございます！」

ココナ達外へ出る。するとそこに立っていたのは…

ノノカ「おかえりなさい！どこ行く？喫茶店？」

ココナ「ヒコザル、鳴き声」

ココナとヒカリは耳を塞いだ。

ヒコザル「つきいいいいー！」

不快な超音波のような音はノノカの鼓膜めがけてあがる。効果はバツグン。

ノノカ「ぬああああああああ！スイマツセンシタ！やめて！やめ…」

ノノカ「…っっていねえ！」

第6話 コトブキへUターン!

一晩ポケモンセンターで休んだココナ達。ジム挑戦のためコトブキへリターン

ココナ「Uターンかあ… テンションさがりますなあ」

ヒカリ「まあまあ、昨日みたいなことにはならないでしょ。」

ココナ「そういえばヒカリはついてくるの?」

ヒカリ「うん、面白そうだしね。」

ココナ「ん? あ、あれは…」

ヒカリ「!?!」

ココナ「またカビゴン?!」

カビゴン「があああああ」ドスーン

ヒカリ「なんでこんなところにカビゴンが… この前のハヤシガ

メといい…」

ヒカリ「まあいいわ。出ておいで、エンペルト!」

エンペルト「ペるとあ!」

ヒカリ「よしメタルクロー!」

エンペルト「ペルア!」

カビゴン「ごおーん」カビゴンはとっしんで打ち返してきた。

ヒカリ「エンペルト!大丈夫!?!」

ココナ「あちやばー、こりやまずいなあ…」

ココナ「よし、くー、影分身!」

くー「くるうーん!」パパパパパパパパパパ

ココナ「ワイルドボルト!」

くー「くるうーん!」ドガ——

カビゴン「ぐるふう…」カビゴンは身を守った。

ヒカリ「エンペルト、ハイドロポンプ!」

カビゴン「げふう」身を守った。

カビゴン「があー!」カビゴンのギガインパクト!

ココナ「くー、よけて!」しかし遅かった。

くー「くるう…」バタッ

くー、エンペルトは倒れた。

ココナ「くー、戻って！」

ヒカリ「エンペルト、休んで。逃げ…たいけど道はないし…」

ココナ「詰んだ＼(´o´)／」

ヒカリ「まだよ。ムクホーク！」

ムクホーク「ホ————ク！」

カビゴン「がう」のしかかり

ムクホーク「ホオ!!」ガツ

ココナ「私にはまだいるんだった。ヒコザル！」

ヒコザル「ひっこおおお」

ココナ「カビゴンに鳴き声！」

ヒコザル「うつきやあああ」

ヒカリ「攻撃を下げてくれるのね…でも、カビゴンはそれだけじゃ…」

ココナ「ヒコザル、ニトロチャージ連発よ！」

ヒカリ「ニトロチャージ…？」

ココナ「技マシンにきまつてるでしょ！」

ヒカリ「よし、ムクホーク、電光石火！」

カビゴン「ぐおお」効いていない

ヒカリ「そこからインフアイト！」

ムクホーク「ホオオオオ！」

カビゴン「ぐああ」

カビゴンのギガインパクト。

ムクホーク「ほおおっ」

ヒカリ「今よココナ！」

ココナ「わかった！ヒコザル、ひのこ！」

ヒコザル「ひっこおおお！」

カビゴン「ぐおっ」

ココナ「もともととひのこ！」

ヒコザル「ひっこおおお！」

ニトロチャージを積んだヒコザルはとても素早い。

さらに相手はギガイんパクトを打った直後のもともと遅いカビゴ
ン。

スピードごり押しである。

ココナ「そろそろね。」

カビゴン「ぐおっ?!」カビゴンはやけどを負った。

ココナ「ヒカリ!」

ヒカリ「はいよ! インフアイト!」

ムクホーク「ホオオオオオオ!」

カビゴン「ぐおお…」

ココナ「タイマーボール!」ココナはボールをカビゴンに投げた。

カビゴン「ぐお?」カポン

トウル トウル トウル キラツ

ココナ「やったああああ! 捕まえた!」

ヒカリ「まさかタイマーボールを…」

ココナ「備えあれば憂いなしよ」

ヒカリ「そして出物腫れ物所嫌わz」

ココナ「それは違う」

数分後

ココナ「ついたー! クロガネに帰ったあ!」

ヒカリ「色々あったねー」

ココナ「じゃあ早速」

ヒカリ「ジム?」

ココナ「いや、け○おん。」

ヒカリ「ズコー」

ココナ「だって街でしかCギアの電波届かないし」

ヒカリ「だからって」

ココナ「今日は録画したけい○んを見ないといけないの!」

Cギア起動

録画再生

ココナ「ああ〜 あずにゃん萌え〜」
ココナ「かわ唯」
ココナ「唯とあずにゃんはよ結婚しろー」ブツブツ
ヒカリ（違う世界に逝っちゃってる…）

T
o
b
e
c
o
n
t

i
n
u
e

第7話 挫折の日

ヒカリ「ほら、行くよ」

ココナ「へいへい…」

ココナ「すいませーん、ジム戦したいんですが…」

ココナ「もしもーしいらっしゃいますかー」

ヒカリ「居ない…」

ココナ「居ないなら仕方ない。桜Trickを観」

ヒカリ「ません。」

ココナ「ええ…」

ヒカリ「あれ？紙がある…」

ー家にいますー

ヒカリ「うそ、休み？」

ココナ「いや、土日以外のAM10:00〜PM6:00までやってるって書いてあったよ」

ヒカリ「あーもう… まあ行ってみよ」

ココナ「いいの？」

ヒカリ「いいんじゃない？」

五分後

ココナ「すいませーん、ジムやりたいんですけどー」

シーン

ココナ「返事がない、ただの屍のようだ。」

ヒカリ「ドア空いてるよ」

ココナ「入っちゃえ」

ヒカリ「ええ… おじやましませーす」

ココナはドアを開けた。それと同時に歌が聞こえる

負けないなんて言わないよ

才能がないなんて言わないよ

だってそんなこと言ったらおしまいさ

笑っていくなら

そのうち強くなるさ

だから笑おうよ Oh そのままでいいから

ソブ「どうもソブです。えつと…どなたですか」

ソブは弾いていたウクレレを置き、話しかけた。

ココナ「今の歌って」

ソブ「ああ、僕が作詞して、キーボードのあいつが作曲してあの真ん中の人が歌ってるよ」

キーボードの人「あいつゆうな。腹パンするぞ」

ソブ「すいませんすいませんすいませ」

キーボード「嘘に決まってるでしょ」

ソブ「いやそう聞こえねえよ…」

ココナ「作詞ですか!」

ヒカリ「盛り上がってるところすいませんが話がだいぶそれてますな」

ココナ「ああ、そうだった。で何話に来たんだっけ」

ヒカリ「いやいやいや」

ヒカリ「ほらあれでしょ あれ… あれ… あれってなんだよ」

ココナ「いや知らねえよ」

ソブ「もしかしてジム戦?」

ココナ「そうそう!それだ! 他人が覚えててどうするのさヒカリ」

ヒカリ「ココナにだけは言われたくない」

ソブ「まあまあ…」

ココナ「お願いします!」

ソブ「おk じゃまってるわ。トゲキツス空を飛ぶ!」

トゲキツス「ふゆうーん」ずばさつ

ガンツ!

ソブ「飛びすぎ… 天井にぶつかったし…」

ソブ「飛びすぎ… 天井にぶつかったし…」

ソブ「飛びすぎ… 天井にぶつかったし…」

ギター「かつこつけて家の中から飛ぶからだよ」

ボーカル「多分かつこつけてじゃなくておおちやくして」

ソブ「しつ… 失礼な！ ここが室内だって忘れてただけだよ！」

ボーカル「そうか、ならしやーな」

キーボード「くねーよ！ むしろそっちのほうがおかしいわ！」

十分ぐらい茶番が続いたため割愛

二十分後

ソブ「よし、んじやあやりますか」

ココナ「そうですねー」

ココナ「ところで審判は？」

ソブ「あ」

ココナ「まさか忘れてたとか」

ソブ「いっいやいるよ！ ちょっとまってて」

ソブはケータイをとった。

ソブ「あーもしもしー、今審判できるー？ あーあんがとー じやねー」

ココナ「？」

ソブ「来てくれるって」

ココナ「やっぱいなかったんじやないですか」

ソブ「違う違う。来るはずだったたけしが急に腹痛を訴えて」

ココナ「いや誰ですか」

ノノカ「参上！ ってあれ？ヒカリさん！」

ヒカリ「ヴェエ!!」

ソブ「あら？お友達？」

ノノカ「突然のお母さん口調」

ココナ「え？どゆこと？」

ノノカ「アルバイトです！ なんかいきなり呼ばれて。審判わすれ
t」

ソブ「いやたけし！ たけし来る予定だったから！ 忘れてないから！」

ココナ「動揺が顔に出てますよ」

ノノカ「まあ始めましょう。出せるポケモンはお互い三匹。どちらかのポケモンが戦闘不能になったら負けです。では勝負開始！」

ココナ「いっておいで、カビゴン！」

カビゴン「ぐおー」

ソブ「行け、ジバコイル！」

ソブ「ジバコイル、影分身！」

ココナ「振り払って！」

ソブ「まだまだ影分身！」

ココナ「なっ… メガトンパンチ！」

ソブ「気にせずもっど！」

ココナ（これじゃあ永遠に当たらない… 地面技はないし…

あつ、地面か！）

ココナ「カビゴン、天井に向かってメガトンパンチ!!」

カビゴン「ぐおっ」ドンツ

カビゴンの右腕が天井に刺さった。

ソブ「？」

ココナ「全体重をかけて下に着地！」

カビゴン 「ぐおー」ドンツ

ソブ「どこを狙って… !!」

カビゴンが着地した振動で地面が大きく揺れた。

ジバコイルの分身がすべて消えた。

ソブ「なるほど、地面を利用したんだ」

ココナ「地面技がなければつくればいい！ってことです」

ソブ「やるねえ… でも甘い。」

ココナ「何がですか？あとは本物のジバコイルにとどめを刺すだ

k… いない！」

ソブ「ラスターカノン！」

ジバコイル「ぼじじじ」ドーン

ダイヤを溶かしてホースから勢いよく飛び出したかのような輝く光線はカビゴンめがけて貫いた。

カビゴン「ぐびゃ…」

ノノカ「カビゴン戦闘不能！」

ココナ「え…？」

ソブ「本物は電磁浮遊で上に隠れさせてたんだよ。アイコンタクトで。」

ココナ「まつ… まあまだ一匹… カビゴン、休んで。行って

きて！ヒコザル」

ココナ「ひのこ！」

ソブ「ジバコイル、十万ボルト！」

ジバコイル「じばばばば」チュドーン

ヒコザル「うきやあ…」

ノノカ「ヒコザル、戦闘不能！」

ココナ「嘘でしょ…」

ソブ「あと一匹出す？」

ココナ「くー、行ってきて…」

くー「くるうーん！ …… くるう？」

ココナ「ううん、なんでもない。」

ソブ「ジバコイル、交代！ いけ、エレキブル」

ココナ「くー、ワールドボルト！」

ソブ「受け止めろ！」

くー「くるうーん！」

ワールドボルトが炸裂した。しかし効いていない。

エレキブル「ぶるるるるる」

ココナ「え、なんで」

ソブ「電気エンジン。素早さをあげてくれてありがとう。」

ココナ「くー、氷のキバ」

ソブ「よけてかわら割り！」

エレキブル「ぶるっ、ぶるるるる！」

電気エンジンが発動したエレキブルのスピードは少し速くなって
いる。

ソブ「いまだ、地震！」

エレキブル「ぐおおおおお」グラグラグラウラ
地震が決まった。効果は抜群だ。

くー「くるうーん…」

ココナ「くー!？」

ソブ「ふう… ありがとう、いいバトルだった。じゃあの一」

ココナ「…。」

第8話 才能

ヒカリ「相手強かったししやーないよー」
ココナ「…。」

ヒカリ「調べたらコトブキジムって新人は7〜8番目に挑戦しないと歯が立たないらしいし」

ココナ「…。」

ヒカリ「ココナだって十分強かったし」

ココナ「強く… ないよ…。」

ヒカリ「だってあの戦い方はすごい」

ココナ「全然すごいくないよ！ だって3タテだよ！ あんなに工夫して全力で戦ったのに… 全く歯が立たないなんて… 強いわけないじゃん！」

ヒカリ「でも」

ココナ「ヒカリは才能があるもん。だから私のことなんて… わかるわけないじゃん！」

ヒカリ「…。」

ココナ「…ごめん」

ヒカリ「…。」

ココナ「ゴメン、ちょっと一人になりたい。」

ココナはどこかへ走っていった。

ヒカリ「ちよっと待って…！」

ヒカリ「ココナ…。」

202番道路

???「レーダーが反応してるぞ」

???「おいおい、反応レベルがマックスの30だぞ。こりや相当な獲物があっちにいるぜ」

???「まじかよ。あっちはコトブキか…。」

???「どうするよ?」

???「もちろん捕獲だ。場合によってはあの輝く都市を真っ暗にして

やるぜ」

「そうだよな」

「さすがシンオウ。イツシユから来たわざわざ来たかいたが、あつたぜ。…ん？誰かが」

ノノカ「誰ですかあなたたち」

「うわっ！ びっくりしたガキかよ」

「んだチビ。俺たちは今忙しいんだ。」

ノノカ「誰がチビですか!? コノヤロー！」ガンツ

ノノカは相手の股間を蹴った。

「うっ…」

▼急所に当たった。効果は抜群だ。

「おいしっかりしろダイロ！」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「てめえ… ダイロのダイロになんてことを！」

「ハーバ、やっちまおうぜ」

ハーバ「オーケー、ジェイソン。ダイロの＜自主規制＞の敵だ！」

ダイロ「まで、俺が行く。俺の＜自主規制＞の恨みは自分で晴らす！」

ジェンソン「復活はやっ」

ノノカ「黙ってたらごちやごちやと… 私にチビと言った罪は重

いですよ！」

ジェイソン「＜自主規制＞を蹴るほうが重罪だろ！」

ノノカ「それぐらいいいじゃないですか！＜自主規制＞ぐらい」

ハーバ「お前… 男の痛みを知らないで…！」

ダイロ「クリムガン、やっちまえ！」

ノノカ「行け、リオル！」

ダイロ「おうおう、珍しいポケモンじゃねえか、これは高く売れるぞ」

ダイロ「クリムガン、ドラゴンクロー！」

クリムガン「くりゅー！」ガリツ

リオル「くおん…！」バタツ

ノノカ「リオル!？」

ジエイソン「おらあ！」

ジエイソンはネットを投げつけた。

ハーバ「ナイスだジエイソン。持って帰って売りさばくぞ。」

ノノカ「ちよつと！リオルを離して！」

ダイロ「うるせえ！ クリムガン、チビにきりさくだ！」

クリムガン「ぐろう！」

ノノカ「!？」

ザクツ

ノノカ「ああ、私は天国でお花さんや蝶々たちと戯れながら日向ぼっこを…。」

ヒカリ「しないわよ！」

ノノカ「ああ、神様だ…」

神様がいる…

神様、私天国に行け

ますか」

ヒカリ「だれが神様よ！」

ノノカ「えっ?! ヒカリさん?! 私… 生きてる?!」

目の前には瀕死になったクリムガンと優雅に飛ぶムクホークの姿があった。

ヒカリ「悪いけどチャンピオン様が来たからにはもう逃げられないわよ、ポケモンハンターさん。」

ダイロ「てめえ！こうなったら…」

ジエイソン「おい、それはやめろ！」

ダイロ「うるせえ！」ドンツ

ダイロは麻酔銃をヒカリに打った。

ヒカリ「うっ…」バタツ

ノノカ「ヒカリさん!？」

ダイロ「麻酔銃だ。死にはせん。だが今から八分の七殺しぐらいにしてやる」

ノノカ「それもうほとんど死んでんじゃん！」

ダイロ「おめえも倒れとけ！おらあ！」ドンツ

ノノカ「これが… 麻酔銃…」バタツ

ジェイソン「やっちゃまったからには記憶失うぐらい殴ってやるしかねえなww」

一方ココナは

ジョーイ「元気になりましたよ。では頑張ってください。」

ココナ「ありがとうございます」

ココナは外へ出て、自動販売機で買った缶コーヒーを開けた。

ココナ「やっぱ向いてないのかな… ヒカリに酷いこと言っ

ちやったし探しに行こう… あれ？なんか変な人がいる… あ

れ?!ヒカリが!」

ココナは走って人影が見えた方へ向かった。

ダイロ「ムーランド、かみつけ!」

ジェイソン「レパルダス、シャドーボール!」

ハーバ「ピジョン、つつく」

ヒカリ「ぐはっ… 痛い… でも動けない…」

ココナ「ヒカリ! これはどういうこと!」

ヒカリ「ココナ… かっこつけて登場したら麻醉銃でうたれ

ちやった… ははははは」

ココナ「笑ってる場合じゃないよ…」

ダイロ「お仲間さんか? 悪いがお前もぶっ倒れてもらうよ」

ハーバ「待て、こいつさつき反応したポケモン持ってるぞ」

ジェイソン「なんだと! じゃあついでに奪ってやるか」

ココナはムーンボールを構えた。しかしその瞬間あの時を思い出してしまった。

ココナ「くー、行ってきて…」

くー「くるうーん! …くるう?」

ココナ「ううん、なんでもない。」

ソブ「ジバコイル、交代! いけ、エレキブル」

負けないなんて言わないよ

才能がないなんて言わないよ

だってそんなこと言ったらおしまいさ

笑っていくなら

そのうち強くなるさ

だから笑おうよ Oh そのままでいいから

ココナ「才能… か。 くだらない。」ニヤツ

ジェyson「ああん？ レパルダスやっちまえ！」

ココナ「行くよくー！」

くー「…!? ……くるうーん！」

くーは満面の笑みで鳴いた。ココナにはその声が「わかったよ！」と聞こえた。

ココナ「飛べ！」

くー「くー！」

ジェyson「何をして」

ハーバ「ww」

くーは大量の電気を放電しながら空へ飛んだ。それがいつの間にか電流ではなくヒカリになっていた。

ダイロ「この光は…!？」

くーはレントラーに進化した。

ココナ「いっけえ！ワイルドボルト！」ズドーン！

レパルダスは倒れた。

ダイロ「才能がないくせに」

ココナ「才能？ そんな言葉知らないわ。だよね？」

くー「ぐるうーん！」

くーは更に光を浴びた。その光は稲妻へとかわる。

ダイロ「なんだこれは…」

くーは雷をまとう。その雷がだんだん翼の形になった。

行くよ！

ハーバ「ムーランドかみつく」

くーはよけた。その時のくーはまるでココナが脳内で操っているかのようだ。

くー「ぐるうーん！」

くーの電流があたりをピカツとまき散る。麻酔銃もムーランドも戦闘不能に。

ココナ「三人にワイルドボルト！」

くー「ぐるうー！」

バタツ

三人は倒れた。それと同時にくーをまとっていた電気は消えた。

ココナ「ふう…」フラツ

ヒカリ「すごい…」

ココナ「ヒカリ… ごめんね」

ヒカリ「大丈夫！ それよりよかった。」

ココナ「何が？」

ヒカリ「なんでもない」

第9話 草むらへ飛び出そう!

ノノカ「昨日のあれなにをやったんですか?! ねえ、ねえ!」

ココナ「だからわかんないって... なんかガーってなってミュンツてなったら」

ヒカリ「わかんないよ!」

ココナ「いやだからさあ、わかんない?」

ヒカリ「うん」 ノノカ「はい」

ココナ「息ぴったりだなおい」

ノノカ「じゃあ私はソノオに向かいますので。」

ヒカリ「じゃあねー」

ヒカリ「でもびっくりしたよ。翼みたいなのがザバツってなって」

ココナ「あんま覚えてないんだよね... ただ集中力が半端なかった」

ヒカリ「どんぐらい」

ココナ「桜Trickの最終回みてるときぐらい」

ヒカリ「いやわかんないよ」

ココナ「ええ...」

ヒカリ「でもよかった。自信取り戻してくれたし」

ココナ「ある日から『意気揚々としてたら大丈夫』ってわかったんだけど、思い出したよ。」

ヒカリ「ある日?」

ココナ「うん、あれは七歳の頃だったっけ...」

私は草むらに出ようとしてたんだよね。

ミヅキ「でも...」

ココナ「大丈夫、大丈夫。ちょっとだけでしょ」

ミヅキって言う幼馴染と218番道路に出たんだ。ポケモンが飛び出してくるから行くなって言われたけど、どうしてもミオシテイに行ってみたくて。

ミヅキ「うわあ!」

ジグザグマが襲ってきたの。しかも大きい。

ココナ「ミヅキ!? 大丈夫!?!」

ミヅキ「大丈夫だけど... 足が...」

ココナ「今手当てする」

私は手当てをしようとしたの。でもジグザグマが襲ってきて...

ココナ「ジグザグマ! ちよつとあっち行って」

ジグザグマは聞いてくれなかった。凶暴な子だったみたい。

ジグザグマ「ふゆるうー!」

ジグザグマが体当たりしてきたの。でもその時...

コリンク「くるうーん!」

ジグザグマ「ふゆるうう?」

コリンク「くるうーん!くるうーん!」

野生のコリンクが助けてくれたの。でも...

ジグザグマ「ふゆるうう!」ガンツ

コリンク「くるう...」

コリンクはレベルが低かったみたいで歯が立たなかった。でも、

ココナ「コリンク、ちよつときて。私に作戦があるの!」

コリンク「くるう?」

ココナ「ジグザグマはノーマルタイプ。だから格闘タイプや鋼タイプが怖いはずなの。だからこの鉄の棒を持って影分身で上から体当たり... できる?」

コリンク「くるうーん!」

ジグザグマ「ふゆるう」

コリンク「くるうー...」

コリンクはジャンプして鉄の棒をくわえた。鉄は日光を反射して、ジグザグマは案の定おびえてた。

ココナ「今だ! たいあたり!」

コリンク「くるうーん！」ドガッ

ジグザグマ「ふゆりゆう…」バタッ

ココナ「やった！倒した！倒したよミヅキ… ミヅキ？」

ミヅキの足の痣は真っ青に悪化していた。

ミヅキ「ごめん… 足手まといになって…」

ココナ「ごめんって… こっちのセリフだよ… 私の子

で… 大丈夫!？」

ナカノ「どうした？ 大丈夫か？」

ココナ「ミヅキが… ミヅキの足が…」

ナカノ「フリーデイン。」

フリーデイン「ふう。」

ナカノ「… なるほど、そういうことか。フリーデイン、あの子を念力で運んであげなさい。」

フリーデイン「ふうう」ミョーン

ナカノ「さて、ココナ。」

ココナ「どうして私の名前を」

ナカノ「フリーデインのサイコパワーでさっきの出来事を見させてもらったからだ。」

ココナ「すごい」

ナカノ「まず最初に叱っておこう。草むらに子供だけででるんじゃない。」

ココナ「ごめんなさい… 私の子で…」

ナカノ「心配するな。彼女は大丈夫だ。そしてほめたたえるべきことがある。」

ココナ「えっ…？」

ナカノ「普通の子なら逃げることも助けを呼ぶことも… もちろん戦うことなどできなかつただろう。だが君は戦った。しかもとつさの判断にもかかわらず最善の戦略で。」

ココナ「照れます。」

ナカノ「私の学校に来ないか？10歳まで通えばかなり強くなるだろう。君ならリーグもめざせる。」

ココナ「えっ」

ナカノ「私はコトブキトレナーズスクールの塾長だ。」

ココナ「まじですか」

ナカノ「まあ考えておいてくれ。」

そして私は通うことになった。ミヅキも入り、

私はさっきのコリンクを捕まえて、みるみる強くなっていった。

そして10歳になって、卒業まであと一か月を切ったところ、毎年恒

例のコトブキジュニアカップが開催された。だけど…

ココナ「引っ越し!?!」

ミヅキ「ごめん…」

ココナ「あやまるところじゃないよ」

ミヅキ「すぐ暑くて遠いところに行くみたいで」

ミヅキ「だからk j c (コトブキジュニアカップの通称。)は絶対決

勝まで行きたい。」

ココナ「わかった。一緒にがんばろう!」

私たちはとにかく練習した。そして開催の日がやってきた。で

も…

「私たちは初戦で当たってしまった。」

審判「ナエトル戦闘不能。よって勝者ココナ選手!」

ココナ母「やったわね!ココナ!」

私はミヅキに勝った。でもうれしくなんてなかった。

だってあんなに練習して… がんばって…なのに初戦で当

たって勝ってしまうなんて… 嬉しいわけではない。

私は決勝進出が決まった。その帰り母に「うれしい」と言われたと

きは泣きながら一人で走って帰ってしまった。

そして決勝の日。

ココナ「私… 昨日勝っちゃって…」

ミヅキ「大丈夫だよ、心配しないで。でも、勝ってね… 私に分

も。」

ココナ「うん…！」

そして決勝に向かった。相手はスクールで一番強いって言われた子だった。名前は忘れちゃったけど、青髪の子だったと思う。

青髪の少女「いけ、ムツクル！」

ココナ「くー、お願い！」

私は負けた。

ミツキになんて言えばいいかわからなかった。負けちゃったから。二週間ミツキに話しかけられなかった。

そして、引越しまであと二日になった。

私は行動に出た。

ココナ「ミツキ、来て。」

ミツキ「どうしたのヒカリちゃん」

ココナ「いいから。」

私に向かったのは青髪の少女の家だった。そう、私が負けた。

青髪「どうしたの？」

ココナ「今からバトルしよう！私、負けないから！」

青髪「いいけど…」

私はどうしても見せたかった。いや、見せなきゃいけなかった。青髪の少女に勝つところを。

そしてバトルの終盤。

青髪「君のコリンクだいぶ疲れてきてるよ！」

ココナ「大丈夫！」

くー「くるうーん！」

青髪（このコリンク… 疲れ果ててるのに目だけは生き生きしてる…）

ココナ「くー！影分身をして空へジャンプ！」

くー「くるうー」

青髪「目くらまし？」

ココナ「違う！くー、氷のキバをしながら急降下でワイルドボル

ト！」

くー「くるうーろーん！」 チュドローン

ムツクル「むくう…！」

青髪「ムツクル!?」

私は勝った。この勝ちは今までで一番すがすがしかった。

ココナ「ほら、自信を持って動けばできないことなんてないじゃん！」

ココナ「だからミツキ、人生意気揚々としてたら… なんとかするよ！」

ミツキ「なんとか… なる…！」

ココナ「そう、だからミツキ。私とバトルしよう！」

ミツキ「えっ」

ココナ「自信を持ったミツキなら勝てる！ あの子に勝った私に勝ったらあの子より強いってことになるじゃん！」

ミツキ「うん… でも、手加減しないでね！」

ココナ「あつたりまえだよ！」

そしてバトルはくーとマリルの相打ちで引き分けになった。

ココナ「決着… つかなかったね…！」

ミツキ「でも… すつきりした」

ココナ「えっ？」

ミツキ「実は私、ちよっぴり嫉妬してた。強いココナちゃんに。それで一緒に練習したのにその相手に負けて… 悔しくないわけないよ」

ココナにはミツキの瞳から光る液体が零れ落ちそうになっていることがわかった。

ミツキ「でもわかった。明るい自分でいればなんとかなるよね！ ありがとうココナ！」

ココナ「ミツキ…！」

ミツキ「私、あっち行ってもミツキでいるから、だからいつか決着つけよ！」

ココナ「うん…！」

その時、私の心の中にあつた黒い絵の具に黒い絵の具を塗り重ねたような感情が消えた。

ココナ「いつか会ったら絶対に戦うんだ！ いい話でしょー」

ヒカリ「うん。そんなことがあつたんだ！」

ココナ「えへへ」

ヒカリ（言えない… その青髪の子が多分私だなんて言えない…）

ココナ「どうしたの？」

ヒカリ「えっ!! いやいやなんでもないよ！」

そして私たちは、草むらへ飛び出した！

第10話 渡れストーカー！マイ登場！！

ノノカ「完璧なはず。」

ノノカ（道筋も地図を見ながら歩いてる。だから迷うわけなんてない。だからこのまま進めばきつと大丈夫…）

ノノカがふと前を見ると、そこには大きな池があった。

ノノカ（こんな池あったっけ… まあいいや）

ノノカは避けて通ろうとしたが巨大な崖があった。

ノノカ（こんな崖あったっけ）

反対側を見ると滝が上から流れていた。

ノノカ（こんな滝あったっけ）

ノノカ「いやねえよ！ なにここどこ？ ママァー！ パパァー！

ポチィー！」

ノノカ「くそう！ ソノオに面白そうなポケモンがいっぱいいると聞いて三年ぶりに行ってストーク… 観察しようと思ったのに道を間違えるとは！ この地図どうなってるの！」

ノノカは池を見てみた。すると小さな船を見つけた。

ノノカ（船だ船がある！ しかも誰かが乗ってるよ！ そうだ乗せて

てつてもらおう！）

ノノカ（だが問題点がある。船乗りはどう話しかけるかだ。

集団だったらノリで連れてつてもらおう。

ノノカ「この船なまらイカしてるねえ！」

船乗りA「いい目してんなじよーちゃん！」

船乗りB「一回乗ってみっか？」

ノノカ「そうこなくっちゃ！ 行けのソノオに近いとこまで行ってくれね？」

船乗りA「おーけーおけー！」

ノノカ「やったあ！」

ああ、でもよく見たら一人だ。

じゃあ一緒に乗りたい気分させるか。

ノノカ「うーみいーのお！こーえーがあー！ききいーたあーくてえ
！」

船乗り「きいみいのお こええを さがああ しいいてるううう」

ノノカ「いいノリですね！」

船乗り「そっちこそ！ 一緒に乗ってく？」

ノノカ「いきましょー！」

でもよく見たらおとなしそうな人だ。それならギャグで行こうかな。

ノノカ「この船でこの『池』を渡って『いけ』るか？」

船乗り「座布団一枚！ ついでに乗ってけ！」

ノノカ「おっしゃ！」

さすがに寒いな。うん。

それならば壁ドンで…

ノノカ「おい船乗り」ドンッ

船乗り「はっ… はいっ… ！！」

ノノカ「私と一緒に池の向こうにレッツパーティーナウ」

船乗り「はい…！ 喜んで…！」

ノノカ「池を越えたら… 結婚しよう！」

船乗り「はいっ…！」

ノノカ「ヨーソロー！」

これだ！

これしかないな。うん。よし行こう！

ノノカ「たのもおー！」

船乗り「なによ…?」

ノノカ「乗せてつてくれないですか？」

船乗り「なんで私がそんなことしなくちゃいけないのよ」

ドンツ

ノノカ「そんなこと言つて ホントは誰かと船デートしたいなあとか… 思つてたんだろ？」キリツ

船乗り「…っ!?!／／／」

ノノカ（えっ…）

船乗り「まつ… まさかそんな訳ないでしょ!／／／」

ノノカ（この人…）

船乗り「だいたい私は好きな女の子と船乗りデートしたいなんて思うなんてことはっ…／／／」

ノノカ（まさか…）

船乗り「…つて!それじゃあ私がまるでれずみたいじゃない!

ちっ… 違うからねっ!私は決してそんな趣味は…／／／」

ノノカ（凶星だああああああああああああああああああああ）

ノノカ（ふざけてやつてみたらまさかズボシになるとは… しか

も相手は相当なツンデレ系 ビビりました。でも…）

ノノカ「これが巷で噂のツンデレですか!」

船乗り「えっ…」

ノノカ「ツンデレさんつて本当にいたんだ!名前は？」

マイ「マイ… っていうかどこがツンデレよっ…」

ノノカ「その口調がです!」

マイ「ゴホン! なにさ… いきなり…」

ノノカ「いや今更クールキャラに戻つても無駄ですよ。」

マイ「とっ… とにかく… 船には乗せないから」

ノノカ「じゃあバトル! バトルで私が勝つたら連れてつてくださ

い! まけたら… なんでもします!」

マイ「なんでそんなことしなくちゃ」

ノノカ「ねえねえお願いしますよー!」ジタバタ

マイ「わかった、わかったから!もうやめて」

！」
ノノカ「そうこなくっちゃ！　じゃあ行きますよ。いけつ、リオル

マイ「全く…　出てきて、クロバット」

ノノカ「リオル、はっけい！」

リオル「くおん！」

マイ「かわしてアクロバット」

クロバット「くろお！」

クロバットは攻撃をかわしアクロバットをうった。効果は抜群。

リオル「くおん…！」

ノノカ「リオル!？」

マイ「私の勝ち。」

ノノカ「そんなあ…　そうですよね…　さよなら…」シユン

マイ「このままじゃ行っちゃう…　あつ！」

マイ「でもあなたのリオルが傷ついている…　ポケモンセンターに

行くために特別に船にのせてあげるわ…！」

ノノカ「えっ!？」

マイ「さつきと乗りなさい！　その…　これはあなたじゃなくて

リオルのためだから…　勘違いしないように…！」

ノノカ「ありがとうございます！」

マイ（私…　何やってんだか…）

第1話 ココナ達、逮捕される。

ノノカ（無事にヒッチハイク成功… いや、船ってヒッチハイクっていうのか？そもそもヒッチハイクってどういう意味なんだろう… まあいいや。つか）

ノノカ（なんでこの人ついてきてるんだろ… ストーカー？ 私ストーキングされてる？

ストーカーとか最悪じゃないですか。）

お前が言うな。

マイ「別にストーキングなんかしてないわ… たまたま道が同じなだけ。」

ノノカ（心読まれた）

ヒカリ「この前の変な子だ！」

お前が言うな。

ノノカ「誰が変な子ですか。ていうかココナさんはどうして…」

ヒカリ「大変なの！すごい大変なの!!」

ノノカ「どうしたんだ」

ヒカリ「草むらが逮捕でいきなりココナされたの！もうどうしよう！」

ノノカ「何を言いたいのかさっぱりですがとにかく大変なのはわかりました。」

五分後

ノノカ「落ち着きました？」

ヒカリ「うん…」

マイ「…なにがあつたのよ」

ヒカリ「実は…ココナが草むらでいきなり逮捕されちゃったの」
ノノカ「え」

1時間前

ヒカリ「いい天気だねえ…」

ココナ「こんな日は家でゴロゴロしてたいね」

ヒカリ「雨でもくもりでもそういうでしょ」

ココナ「なぜばれたし」

ヒカリ「ココナと話したらさうとうな天然ボケじゃなかったら五分でばれるわ。」

ココナ「さうとうな天然ボケが目の前にいるんだが。」

ヒカリ「なぜばれたし」

ココナ「出ましたブーメラン発言」

???「ちよつと待ちなさい！」

ココナ「なんですか」

ジュンサー「ジュンサーです。逮捕状が出ているので署までご同行願います。」

ココナ「あ、わかりました。署ですね… ちよつとまってください…」

ココナ「…つて今なんて」

ジュンサー「署です。あなたを逮捕します。」

ココナ「あはははは冗談きついですよwww 隠しカメラはどこにあるんですかwww」

ジュンサー「動くな！撃ちますよ！」

ココナ「あはははははははは… ははは…」

ヒカリ「つて感じで捕まっちゃった」テヘ

ノノカ（テヘじゃねえよ）

ノノカ「何したんですか？」

ヒカリ「いや、事情を聴かされる間もなく連れてかれて」

???「そこのチビ！」

ノノカ「誰だ今チビつつったの」

ジュンサー「ジュンサーだ！ストーカー行為をしたとのことでお前に逮捕状が出ている！だから逮捕する」

ノノカ「…は？」

ノノカ「ちよつと待って！ 私なんもしてないです！ みんなもなにか言ってやってください！」

ヒカリ「まあ仕方ないわね。」

マイ「いつかこうなると思ってたわ。」

ノノカ「つておいしいいいい」

ジュンサー1「ほら行くぞ」

ヒカリ「どうする？」

ノノカ「私に言われても…」

ヒカリ「あれ？またジュンサーさんが」

ジュンサー2「あなたがマイさんですね」

マイ「…はい」

ジュンサー2「ツンデレ罪で逮捕します」

マイ「((ツンデレ罪ってなにイイイイイ!!??))」

ヒカリ「えっ… ちよ… あっ、また違う人が」

ジュンサー3「ヒカリさんですか？」

ヒカリ(嫌な予感が)

ジュンサー3「なんか逮捕します」

ヒカリ「((私だけ適当だああああ))」

取調室

警察「やったんだろ？なあ？」

ココナ「あの… やったってなにを」

警察「とぼけるんじゃない！ こんなことして…」

ホウエンのお

母さんも泣いてるぞ！」

ココナ「いや実家コトブキですし」

警察「俺の母さんだよ！」

ココナ「お前のお母さんかよ！」

警察「警察にお前とか言うな！ 用務妨害罪で再逮捕する！」

ココナ「それで執行されんの!! まず私にしたらし」

警察「あの… あれだ… 落ちてたパン食ったろ」

ココナ「食ってないしそれ犯罪なの!？」

警察「あれだ、残飯不純飲食罪だ！」

ココナ「いや絶対今作つたら！」

警察「警察を疑うのか！俺侮辱罪だ！」

ココナ「なにその田舎の不良が言つてそんな罪名?!ないでしょ！」

警察「あるわけないだろ！何言つてやがる！」

ココナ「っておい」

警察「とりあえずポケモンを没収する！ 抵抗されたら困るからな
！」

ココナ「あ、ちよ…！」

ココナ（どうなつてんのこれ…）

T o b e c o n t i n u e

第12話 波乱の刑務所

ココナ「あの、ドツキりなら早く言ってもらえませんか？」

ココナは残飯不純飲食罪とかなんとかで自称警察から取り調べを受けていた。

警察「なにがドツキりだ。貴様、八つ裂きにするぞ?」

ココナ「警察が脅迫しちゃったよ...」

警察「とりあえず牢屋に入れ!今連行してやる。」

ココナ「とりあえず牢屋つてなに?! そんな喫茶店でコーヒー頼むみたいなノリで牢屋入れていいの!?!」

警察「いいから来い!」

その隣の部屋では

警察「...」

マイ「...」

警察「...」

マイ「...あの」

警察「...」

マイ「ツンデレ罪つてなんですか」

警察「...」

マイ「...あの なんか言つてください。」

警察「かつ丼食うか」

マイ「はええよ! 普通それ最後でしょ! 第一声がかつ丼つてどんなサスペンスドラマだよ!」

警察「TKGの方がよかったか?」

マイ「そこじゃないわよ!」

警察「じゃあ海鮮丼?」

マイ「食べたいな! うん。普通に食べたいけどそこじゃない!」

警察「そんな予算ねえよ」

マイ「だろうね!」

警察「ポケモンは預かる。整理ができるまで牢屋に入っとけ」

マイ「ちよつと！」

そのまた隣では

ノノカ「私なにしたんですか」

警察「ストーキング。」

ノノカ「ちよつと待ってくだ」

警察「ストーカー行為は親告罪で、罰則は6か月以下の懲役、または50万円以下の罰金である。また、警察は警告書による警告ができ、この警告に従わない場合、都道府県公安委員会が禁止命令を出すことができる。命令に従わない場合には1年以下の懲役または100万円の以下の罰金となる。また、告訴する以外に、被害者の申し出により警察が弁護士を紹介や防犯アラームの貸し出しなど、国家公安委員会規則に基づく援助を定める。女性だけでなく男性も保護対象であり加害者が同性でも適用される。

2012年11月に発生した逗子ストーカー殺人事件を受けて、2000年の本法成立以来初の改正案が2013年6月26日に衆議院で可決。(Wikipediaより引用。)

ノノカ「」

警察「こつちに来い。」

ノノカ「」

その向かいの部屋では

ヒカリ「いや私だけ絶対おかしいよね？」

警察「というと？」

ヒカリ「なんかかつてなんだよなんかかって。おかしいでしょ。せめてなんか偽造しろよ！」

ココナ・・・落ちてた食パンを拾い食いし逮捕。

ノノカ・・・ストーカー行為により逮捕。

マイ・・・ツンデレ罪で逮捕。

ヒカリ・・・なんか逮捕。

警察「逮捕は逮捕なんだよ。」

ヒカリ「わけがわからないよ」

警察「じゃあ逆にお前が何もしてないという証拠は？」

ヒカリ「私がしてないもの！」

警察「もし… 知らないうちに何かをしていたら？」

ヒカリ「そんなことっ…」

警察「じゃあお前は呼吸しているときの感覚をすべて覚えているのか？」

ヒカリ「それは…」

警察「意識なんてほぼない… だろ？」

ヒカリ「まあ… はい。」

警察「それと同じように無意識で何かをしていたら…」

ヒカリ「でも…」

警察「そういうことなんだよ」

ヒカリ「私… 私…」

警察「涙拭けよ。お前になら償うことが可能だ。さあ、ポケモンを置き牢屋でその日を待つんだ！」

ヒカリ「私に… できますか…」

警察「できるさ… 君なら… 雨雲がいつかは去り、虹が出るようにな！」

ヒカリ「…はい！」 ↑ 騙されやすい

五分後

警察1「こっちだ！」

ココナ「ちよつと待てって」

警察2「入れよ」

マイ「こんなの絶対おかしいわ！」

警察3「ここだ」

ノノカ「」

警察4「待ってるぜ」

ヒカリ「はい…」

ガチャッ

ココナ「ロケット団って…!」

ココナ「なに?」

ロケット団「「…は?」」

ヒカリ「昔カントーと譲渡にいたドロボー集団よ! 確か二回滅亡したはずなのに」

ロケット団員1「自然の豊かなシンオウは俺たちにとって都合がいんだ!」

ロケット団員2「まあ、俺たちだけじゃないがな」

ロケット団員3「おい」

ロケット団員2「おっと、おしゃべりが過ぎたな」

ロケット団員4「…。」

ココナ「泥棒三人ぐらい私のレントラーで十分! 出てきてく…
ってあれ?」

ココナ「そういえば渡しちやったのか…」

ヒカリ「ゴメン私も」

ノノカ「私もです」

マイ「悪かったわね取られて」

ロケット団員3「全員から没収してやったぜ お前らに抵抗手段はない。」

ロケット団員1「じゃあなww」

ロケット団員4「…。」

マイ「ちよっと!」

ヒカリ「行っちゃった…」

???「すまない…」

ココナ「へ?」

署長「この署長だ… 私が弱いばかりに… 市民を守るどころかこんなことに… 実に情けない…」

警察「僕は本物の警察だ… だが、何もできなかった僕はもう警察を名乗る資格はない… 本当にすまない…」

ジュンサー「私も弱いばかりに衣装を奪われ利用されてしまったわ…」

ココナ「あなたたちは悪くないです… それに…」

ココナ「なんか逮捕で騙されたヒカリの50倍はマシです。」

ヒカリ「ははは… ↑なんか逮捕で騙された人

マイ「で、どう脱出するかっていうのが問題なわけだけど」

ノノカ「金づる作戦」

マイ「却下」

ヒカリ「お色気作戦」うっふーん

マイ「却下」

ココナ「百合展開作戦」

マイ「却下」

十分後

ヒカリ「で、最終的に残った作戦が『猫だまし作戦』『ウンコ漏れそうなんですけど作戦』『目潰し作戦』なわけだ。」

マイ「猫だましと目潰しはタイミングが最悪来ないかもしれないし、ウンコ漏れそう作戦は信じてもらえないでしょ」

ノノカ「じゃあ三つを一つの作戦に凝縮させてみますか」

ココナ「それいいね！ ウンコ漏れそうって呼んで、そこに来た口ケツト団を猫だまししたあと目潰しして鍵を奪う。なずけてウンコ騙し潰し作戦！」

マイ「ネーミングセンスどうにかしなさいよ」

ヒカリ「これで行こう！ じゃあその漏らしそうな演技すんの誰にする？」

一同「…。」

一分後

マイ「なんで私が…」

ノノカ「しょうがないじゃないですか」

ココナ「ジャンケンで負けた人って決めたんだし、しゃーないよ。」

グツ

マイ「忘れてるかもしれないけど私コミュ症でクーデレだったのよ」

ヒカリ「それが今ではツツコミ担当かつツンデレに」

マイ「なんでこんなことに」

ノノカ「早くしてくださいよ。」

マイ「わかったわよ…。」

マイ「誰かあ！ 誰か来てください！ あの… ブツが漏れそうなの！」

ココナ「ソ、ソレハタイヘンダー」

ヒカリ「誰か来てくれないとこの署臭くなっちゃうなー どうしようかなー」

ロケット団員2「それは本当か！ …… って騙されるかボケ！」

ヒカリ「猫だましッ」パチンッ

ロケット団員2「わっ」

ノノカ「目つぶしっ」グサッ

ロケット団員2「ぎゃああああああああ」

ココナ「今だ… 鍵を…」

ロケット団員1「おい、なにをやっている!？」

ロケット団員3「しつかりしろ！」

ヒカリ「来ちゃったよ」

ロケット団員1「よくやつてくれたな。おかげさまでお前らをいたぶることにした。」

ココナ「それはどうも」

ロケット団員4「これはしばきあげるしかないな。」

ロケット団員3「そうだな。早くやつちまおうぜ。」

ロケット団員4「こいつらじゃない。」

ロケット団員1「え？」

ロケット団員4は1人の胸に右フック、もう一人の脇腹に回し蹴りを入れた。

ヒカリ「へ？」アゼン

ロケット団員1「お前… どういうことだ… 何者だ…」バタッ

ハンサム「よくぞ聞いてくれた。国際警察、コードネーム：ハンサムだ。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第13話 シャボンを突破せよ!

ココナはただ唾然と彼がロケット団達を御用していく姿を見ていた。

ハンサム「大丈夫か?そこに君たちのモンスターボールがある。悪いが先に行くぞ。」

ココナ「あ…ありがとうございます…」

したつば5「おっと、そうはさせないぜ。」

したつば6「軽く10人20人という俺たちを突破して幹部様のことまでいくつもりかい?」

ロケット団のしたつばと思われる黒い制服を着た男達が道をふさぎ、ポケモンを繰り出した。

ハンサム「クソ…これじゃあラチがあかん…」

ノノカ「おらあ!」ガントツ

ノノカの頭突きがハンサムの目の前にいる数名に衝撃を与え倒れさせた。

ノノカ「道は空きました。早くそのスカンプーとやらのところに行ってください。」

ココナ「幹部な。」

ハンサム「だが…」

ココナ「ここは私たちに任せてください。」

マイ「こんな不良集団なんか四人で十分よ。」

ハンサム「しかし…」

ヒカリ「チャンピオンだって一人いますから!ダイジョーブです!」

ココナ「えっどこ!?!」キョロキョロ

ヒカリ「おいコラ」

ハンサム「ありがとう。必ず戻る!」

したつば5「おいまそ…」

ノノカ「騙したこと忘れてないですよね…?」ギロツ

ヒカリ「洗脳してきたやつはどの子かなあ〜」ニコオツ

したつぱ達」

ヒカリ「ココナあ… ちょっと戦場の死神にでもなってみない：

？」ニコツ

ココナ「しゃーないね…」

ココナは肩をすくめた。

ノノカ「リオル、グロウパンチ！」

ヒカリ「ムクホーク、ブレイブバード エンペルト、ハイドロポン
プ！」

マイ「クロバット、アクロバット。」

ココナ「くー、氷のキバ！ ヒコザル、ニトロチャージ！ カビゴ
ン、のしかかり！」

くーは氷のキバで何匹もの敵を薙ぎ払い、エンペルトのハイドロポ
ンプとカビゴンののしかかりの振動でまわりのポケモンやしたつぱ
がひとつ、ふたつ、みつつと次々に飛んでいく。 リオルのグロウパ
ンチはポケモンというよりしたつぱの股間に命中している。つかど
んだけ恨んでんだよ。 その中を迸っているのがムクホーク。 ポ
ケモンやしたつぱをブレイブバードとインファイトのコンボでなぎ
倒していく。

そしてあつという間にあたりは瀕死になったポケモンと股間を抑
え口から泡を吹きながら倒れこんでいるしたつぱのみになった。

ココナ「こんぐらいかえ？」

ノノカ「ちよつと優しすぎたかな」

マイ（これ以上何があるんだよ。）

マイはそう思いながらもがき苦しむ彼らを見つめる。

ヒカリ「国際なんたらさんのところに行くか！」

マイ「国際ならまだしも警察忘れてどうすんのよ」

ココナ「とりあえず行こうよ」

ココナ達は廊下を進んだ。するとある時戦闘音のようなものが聞
こえた。

ハンサム「グレッグ、どくつきだ！」

???「クリムガン、ドラゴンクローオ！」

ヒカリ「これはハンサムさんの声!？」

マイ「急ぐわよ!」

???「行かせねえぜ?」ドンツ

白服の男がいびつな形をした銃をうった。

その銃から出たものがシャボン玉状になりココナたちをひとりひとり別々に閉じ込めた。

ココナ「なにこれ!？」

ヒカリ「壊せばいいことですよ。ムクホーク、インファイト!」

白服の男「無駄だ。内側から壊すことはできない。膜は特殊な氷でできていて、外側は鉄を化学変化させたものだ。それと」

シャボンの膜からエネルギーが出てヒカリに命中した。

ヒカリ「うっ… なにこれ…」

ココナ「ヒカリ!」

白服の男「その膜は内側の攻撃を同じ威力と同じ長さでエネルギーを跳ね返す。インファイトとなるとその時間威力はそうとうだろうなあww」

ノノカ「卑怯です!」

マイ「私たちを開放しなさい!」ドンツドンツ

白服の男「だからあ、その膜に攻撃しちゃだめだってwwww」

マイ「わあっ!？」

マイに小さなエネルギーが命中した。

ココナ「長らく説明どうもありがとうございます!」ニヤツ

白服の男「どうした?強がっちゃまってww」

ココナ「笑っていられるのも今のうちだよ? くー、透視で膜の隙間を探して。」

くー「くるうー… くるうーん!」

ココナ「あつたんだね。じゃあ全部の隙間に細い電流を通して外側から当てるんだ!」

白服の男「そんな威力じゃ壊せるわけないだろww」

ココナ「確かに壊すことはできない。でも温めることなら電撃で十分。」ニヤツ

白服の男「まさか…!？」

電撃が与えた熱が鉄を通って膜を温める。そして膜が解け始めた。

ココナ「外側は鉄でできてるんだよね？鉄は伝熱性だから電撃で温めたらすぐ内側に行く。そして膜は氷だから…」

バシヤンツ

ココナ「膜はすぐに解ける。そして外側からの負荷だからエネルギーは出ない。」

白服の男「クソ！」

ココナ「膜が解けたらもう怖くない。くー、ワイルドボルト！カビゴン、体当たり！」

くー「ぐるうーうー!!」

カビゴン「ぐおおおおおおおおおおお」

ガドンツという音を立て膜のなくなったシャボン状の壁はいつきに崩れ落ちた。

ココナ「さてと、覚悟はできてる？」